

## 第2章 高岡短期大学の 成長期

昭和63年4月、第一期生の卒業と同時に1年制の専攻科、地域産業専攻が設置された。この地域産業専攻は、産業工芸、産業情報の両学科が連携交流することにより新しい領域を開拓し、地域社会に大学での教育・研究を還元し、あわせて地域文化の発展向上に寄与しようとするものである。

また、校庭の木々は、幾度かの年月を経て幹が太く大きくなり枝葉も茂り、葉も黄緑色から濃緑色へと変化し逞しく成長していた。早朝には、二上山の麓から降りてきた野うさぎや雉を見ることもあった。そして、学内の落ち着いた雰囲気、教室での学生たちの真剣な表情や眼差し、エントランスホールからの朗らかな笑い声に私たちは爽やかな幸福に浸ることができた。「創己祭」と名付けられた大学祭は、年々華やかさを増し会場からは学生の歓声がひびいていた。教職員、地域住民の参加も多くなりにぎやかなひと時が過ぎた。

## 第三代副学長として



第3代副学長 戸田成一

私は、平成元年十二月から同五年三月までの三年四か月間、高岡短大の副学長として勤めさせていただきました。

第三代目の副学長として、初代の横山学長と二代目の宮本学長を補佐いたしました。

それ以前は、文部省・文化庁等で教育、学術、文化の職務を担当し、ついで電気通信大、一橋大、広島大の各事務局長を歴任していました。

大学の事務局長は、事務的な側面から学長をはじめ教官をサポートする、いわば脇役にすぎず、私としてはもの足りなかったのですが、高岡短大では学長につぐ主役として教務、学生指導、教官人事、大学開放事業等すべての職務を担当することができて大変嬉しかったです。

それだけに、私なりに張り切って副学長の仕事に打ち込みました。

その経験等が次の鈴鹿工業高等専門学校の学校長になったとき、大いに役立ったことは言うまでもありません。

私が副学長に就任したのは開学してから六年目でして、高岡短大は新構想大学としてすべてが軌道に乗り順調に活動しておりました。

それだけに私は、三年あまりの在職中それぞれの職務を楽しくやらせてもらい、あまり大きな苦労はしませんでした。

しかし強いて言うならば、いくつか困難な問題があり、その解決に重点的に努力したということはあります。

ここでは、それらのうち二件だけとりあげて書きたいと思います。

一件目は、学長選考規則の制定です。

私が着任したとき、学内の諸規則等は整備されていて短大運営はなんら支障なく行なわれていました。

ただ、学長選考規則だけは、まだ出来ていませんでした。それは、創設(準備から)段階では文部大臣が選考し任命するしかなかったからです。

しかし年数の経過につれて二代目学長選考の必要性が強まってきましたので、私は学長選考規則の作成に鋭意

努力しました。

やはり小規模な新構想短大にふさわしい、適切なやり方があるはずだと思い、あれこれ考えた結果、他大学にはないユニークな選考方法を打ち出しました。

すなわち、「学長候補者の選考は教授会が行う」を基本にして、具体的には次の四段階を踏んで候補者を選ぶことにしました。

### (一) 推薦委員会の候補適任者の推薦

教授会に推薦委員会を置き、学長、副学長、教授会が選出した教授九名で構成し、候補適任者候補の中から三名程度を選定し教授会に推薦する。

### (二) 教授会の候補適任者の決定

教授会は、前記の推薦に基づき候補適任者を決定する。

### (三) 選挙の実施

教授会は、学長候補者を選考するため選挙を実施する。

選挙資格者は、学長、副学長、教授、助教授、専任講師とし、候補適任者について単記無記名投票を行ない、過半数を得た者を学長候補者とする。

### (四) 教授会の学長候補者の決定

教授会は、前期の選挙結果に基づき学長候補を決定し学長に報告する。

私は、文部省の了承も得て、平成二年三月にこの規則を制定し、翌年に二代目学長の選考を行ない、翌々年四月に二代目学長の文部大臣任命という運びまでもっていききました。

大役を果たし、ほっとした気持でした。

二件目は、開放事業に対する教官の職務意識の問題です。

高岡短大には、地域社会に開かれた大学として大学開放センターが併設(センター長は副学長)され毎年度いろいろな公開事業を本格的に行なっています。

## 平成元年(1989)

### 主なできごと

(3.20)昭和63年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式(第1回)を挙行。(4.1)学科長会議の名称を総務会に変更。(4.8)平成元年度入学式を挙行。

公開講座、テレビ講座、作品展、シンポジウム、フォーラム等として、他からの講師等もありますが、主として同短大の教官が担当しています。

ところが同短大は、小規模で教官数も少なく、開放事業の実施は教官たちに少なからず負担をかけています。

そのためもあり、この事業の取組みに消極的な教官がかなりいました。(この状況が進みますと、特定の専攻や特定の教官にだけ長期的に重い負担がかかり、不均

衡、不公平が拡大していきます。)

しかし各教官は、同短大の性格上、「教育」、「研究」、「公開事業」の三種類の職務を担当しなければなりません。

すなわち公開事業の担当は、各教官の本来の職務の三つ目のものとして担当してもらう必要があり、私はそのことを機会あるごとに各教官に説明し認識を深めてもらうよう努めました。

## 地域産業資料研究室の生立ち



名誉教授 後藤義雄

### 高岡高等商業の商品見本

平成元年6月資料研究室が発足し、旧高岡高商の商品見本といわれるものを見た。この資料は高岡工専、富大工学部と引継がれ、短大に移管されてきたものです。約50点ほどでしたが保管上の不備と埃にもまみれ、整理番号のエンメル描きなど無神経さが目立ちましたが漸く37点ほど拾うことができました。

この商品見本は流通市場から選ばれたものと思われるのですが、木製品、陶磁器、金属器、漆器などで、なかには当時の輸出見本もあったようです。私の専攻する漆芸では、目立ったものに黒漆螺鈿軸盆があり、宝相華唐草の文様を夜光の薄貝で加飾したものです。ただ永い間の環境からか青貝の一部に浮きが見られるのは残念です。産地は沖縄、奈良、高岡などが考えられます。丸形食籠は沖縄の堆錦技法による作品で立派なものです。私にはいつか図録でみた菊唐草堆錦食籠(東京国立博物館蔵)に重なって見えました。あるいは模作かも知れません。また沖縄の朱漆八角形湯庫(タークー)もあります。これは内部に錫製の容器を入れ、保温用とした中国スタイルの魔法瓶でしょう。琉球王府の時代から輸出していた品種と思います。

このように高岡高商の収集した商品見本は、産地的特色、技術技法、デザインの変遷など産業資料として多くのものを含んでいます。

### 話題 展示 資料

展示を目的とした会議のなかで計算機の発展過程が考えられないかと提案があった。

私には、固定尺、滑尺、カーソルを動かして演算する辺見計算尺が浮かび、更に何十年振りかで、あのやかましい音のする歯車機構による手廻し式卓上計算機が思い浮かんだ。今日の電卓までのことを考えると、その時代毎の理論、技術の変化と社会への影響を考え大賛成であったが、図表計算、記憶装置、今日の半導体による電子計算機にいたるまでの範囲の大きさと予算上から断念したのは残念であった。

公開事業として県工業技術センタ、高岡デザイン工芸センターの協力を得て、工芸三機関合同展「用と美の世界」を本学エントランスホールに展示したのは平成3年7月でした。本学は工芸三専攻の実技試料。技術センターはレーザー光による微細加工技術、デザイン工芸センターは加飾パターン試料を展示した。

資料研究室は、学生、教官の研究資料および作品、産地製品、材料と加工技術、時代とデザイン研究の蓄積が大学の歴史を作るものと私は思っています。この室に埋もれることによってこそ新しいアイデアと発見があるものと考えます。

### 平成2年(1990)

#### 主なできごと

(3.20)平成元年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙る。(3.30)高岡短期大学紀要創刊号を発行。(4.9)平成2年度入学式を挙る。(12.25)樹木見本園工事の竣工。

## 中村富栄氏の作品寄贈

クラフトマンとして活動してきた中村先生がその作品49点を寄贈されたのは平成10年でした。私は既に退官していましたが、展示初日に見学し、それぞれに思い出もあり、懐かしい一日でした。

## 体育授業への回想

国立高岡短期大学と書くだけで、当時の思いが彷彿として蘇る。新設校で新しいものを生み出すその事の楽しさに明け暮れた日々であった。昭和61年第1期生の入学と同時に体育教員として赴任し、全力で走り切った10年間であった。ここでは、体育授業等の実践事例を記録を頼りに記憶を呼び起こし、簡略に回想してみたいと思う。

体育館(教室)、グラウンドやコートは勿論、用器具のない素手の授業をどうするか、新任の加藤敏弘助手と共に思案する日々が続いた。ともかく近傍の広場、運動のできる場所を尋ね、その確保に走り回った。いくつかの候補から二上青少年の家の体育館と併設の散策オリエンテーリングコース、ゴルフ場、工業技術センター広場等を主な学習活動の場として選んだ。しかし、どの場所も往復の徒歩に時間がかかり、実働時間の制限は空しいものだった。ただ、学生達のやる気、明るさ、元気とに支えられて克服していった。活動場所の確保と共に10月にテニスコート、12月に体育館の年内完成を目的に体育授業を進めながら基本的な指標を掲げ実践に移していった。指標は、次の3点からなり同時にこれらを支える方策も検討しながら授業を展開したのである。

(1)楽しい授業 体育は、笛の合図と教官からの指示で一定の運動量を強いられるのではなく、自発的で楽しい学習であれば、という考えに立ち、楽しさの原点は学習活動の中で動いているそのものが楽しいという事であろう。又、走りや苦しさ、動きの支えで楽しさが生まれるのであって、その楽しさに持続性がなければ本物ではないととらえ、この様な考え方で授業を押し進める事とした。

先生は88年に国井喜太郎賞を受けられ、自宅工房でも実験的な仕事を続けられました。なかでも漆の世界に縄目の造形、あるいは刷毛目や、目はじき塗りなどの商品サンプルは時代を映す資料として貴重なものと思います。



名誉教授 尾崎秀男

(2)号令と笛のない授業 かなり以前までは号令と笛は表裏一体の感があったが、ここでは共に使わない様にした。特に不用意な号令や笛は、学習活動の中断や動きが左右される場面が多々あり、学習効果があがらないという思いからである。今までの習慣上から当初戸惑いも見られたが、次第に馴化し動きの流れがスムーズに推移し、息の長い活動が随所に展開される様になった。又、号令や笛にかえて音楽を用いた事も授業の楽しさに力添えができたものと思っている。

(3)音楽の導入 運動は、自発的で楽しくなければ持続性がないという考えから、学生が音楽に合わせて自発的に授業を進める方法を取り入れた。ウォームアップはビートの効いたディスコを流し、ストレッチは落ち着いた軽音楽、競技中は軽快なポップスという具合に、活動毎に曲のジャンルを使い分けた。授業中に音楽をかける事に殆どの学生が賛成し、その理由として、リズムがあると動きの動作に入りやすい、授業が明るい雰囲気になる、気分がのって“やるぞ”という意欲がでる、休憩中にリラックスでき、疲れがほぐれる、という意見が多く、うまく利用すれば様々なプラス効果が期待できると判断し、選曲など更に吟味し学生の主体性や自信を育てる為の積極的な働きかけが大切と確認することができた。

◎ニュースポーツと創意工夫 初めて試みる種目に新鮮味と興味を示し、学習効果も大である。ルールやゲームの進め方も工夫しアイデアが多く生まれ、自分達で納得のいく授業展開をし、次第に学習能力を高めていく事が

### 平成3年(1991)

#### 主なできごと

(3.20)平成2年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙行。(4.8)平成3年度入学式を挙行。(12.17)初の学長選挙を施行し、次期学長に宮本匡章(大阪大学教授)を選出。

わかった。一輪車、スケートボード、フレッシュテニス、インデアカ、バードゴルフ等のニュースポーツに顕著である。その他、学習活動の個人記録の記入による意欲の向上、これらを支える体育環境の充実等大切である事は云うまでもない。

二上山散策コースは、入学当初山に入り、高台から小矢部川の蛇行の雄大さ、一望する高岡市内を眺望し、この地で学んだという意識を持つよい機会であったろう。車椅子の学生も2人の職員の力を借りて車毎高台に運んでもらった事もあった。グループ毎入山しコースを

巡るが、予定通りに集合地点に戻らず夜の暗い道を逆走し探しに出かけた事も度々、暗がりの中でようやく戻ってきたグループを見つけホッとした事を思い出す。

二上山は下から眺めるだけでなく、一回位は登って高岡の地を一望するのもいいのでなかるうか。力づけてくれる何かを持っていると思うのだが。1期生から10期生までは全て二上の高台から一望を試みている筈である。

私自身は二上山に100回以上も足を運び、二上山への郷愁は尽きない。大学を辞して九年、星霜を経て活躍する卒業生の朗報を聞くと、嬉しさと誇らしい気持が交錯する。

## 教えながら学んだこと



名誉教授 久保脩治

長い間民間会社にいると、齢が加わるとともに後輩を教育する必要がでてくる。日々の忙しい業務のなかで、個別に教育業務をとれず、したがって<On the Job Training>仕事を通じて部下を教育訓練をすることになる。学校の先生の職に就くにあたって、教育の先輩を訪ねると‘教育とは林業である’とおっしゃる。一年毎に収穫する農業と異なり、長い目で人間の生長をみとどけよの意味がこもっている。

これまで自分の子供の入学式卒業式に出席すらししたことのない筆者だが、自分の孫に近い学生の式に教師として出席すると、自分の子に希望と期待を託する親の気持が伝わり、新たな感動がこみ上がってくる。

文系で女子学生の多い学校のため、数が少ない理系の先生の使命は、社会に巣立つ学生に台頭してくる情報社会を支える科学、技術の常識をわかりやすく教えることとした。

1学年200人位の学生を相手にした教室で下手な話しのせいか、中には隣とおしゃべりする学生が見受けられた。しかし文明の辿った道について話した講義のなかで、<地球環境問題>大気中の炭酸ガスの増加に伴う地球の温暖化の話に移ると、顔が先生の方に向き静かに話しを聞く姿勢に変ったことが印象に残っている。

我々より2世代近い若い学生には、この課題は深刻な問題と捉るのであらう。

学生が多くて1人ずつ出欠を取ることも出来ず、講義が3~4回続くと試験を作文で行ったが、理解力のほかに考える力を養うために感想を含む問題を加えた。答案を読むと、古代文明の発祥の地チグリスユーフラテス、そうしてヨーロッパ文明の中心地のギリシャなど、かつて栄華を極めた地が何千年か経て、砂漠あるいはそれに近い荒地になった話しに高い関心があったことが意外であった。芭蕉の句の‘夏草やつわものどもが夢の跡’のような情緒的のものでなく、最近の環境考古学によれば、この栄光の大地はかつては森林植物が豊かに繁茂していたことが証明されている。

学校を退官して9年になりその間趣味に近い執筆活動をやっているが、強い関心があるのは家電や自動車の世界をリードする地位にまで登った日本のモノづくりである。

その要因に、平均教育レベルが高いこと、そうして単一民族であることが言われた。それは一面であって、仕事に対するとらえ方が欧米先進国と異なる面がある。とくに技能職のモノづくりにみられる、真面目に働き道を踏み外さない愚直性である。

### 平成4年(1992)

#### 主なできごと

(3.19)平成3年度卒業証書授与式ならびに専攻科地域産業専攻修了証書授与式を挙げる。(3.31)学長 横山 保が任期満了により退任。  
(4.1)第2代学長に宮本匡章(大阪大学教授)が発令される。(4.8)平成4年度入学式を挙げる。

しかし最近の若者は学校を卒業しても、まともな職につきたがらないフリータが現在問題に上がっている。豊かになり小産小子の世の中で、子供は家庭でも学校でも甘やかされながら育てられ、一方グローバル化の荒波のなかにある企業に飛び込むのに億劫になるとみるが如何であらうか。話しを本題に戻す。

産業情報学科にいた一人の男子学生に、性格も良いし素性のよい会社に就職の世話をしようと思きかけたが、なかなか首をタテにふらない。これまでアルバイトをしてきた金型屋の仕事が気に入ったとし、また雇用主もよい人だからという。これも彼の選択肢だからと無理に説

得するのを止めた。

これが頭にあったので、職人という職種をどう思うかについて、産業工芸学科の学生に聞いたことがある。数人のグループのなかの一人の女子学生はカッコがよい職業、尊敬すべき職業であると答え、意を強くしたことが記憶にある。

9年間の赴任期間で思い出も多いが、頭に浮かんだことを述べてみた。高岡短大に赴任する際の挨拶状で、郷土の富山で教育を受けながら育ち、そのご離れた郷土に再び戻って恩返しすると気負って見たが、学生から学んだことも多かった。

## 夢多き日々の12年



名誉教授 小関利紀也

昭和61年の雪の多い4月、赴任した頃の高岡短期大学では、どうしたら社会的要請に応える卒業生を送り出せるかを考える毎日であった。如何なる大学を創るべきか、新しい大学像を求めて将来構想検討委員会が設置され、論議は専攻科設置の後にまで続けられた。

そうした時に何時も私の思いの根底にあったのは、20年程も前の、初めて北陸の地、金沢を訪れた昭和38年の冬、今でも話題にのぼる豪雪の年のことであった。

それは高度経済成長期のまっただなか、急上昇を続ける多くの家電製品の普及率が80%を超える中で、低迷を続ける電気掃除機の問題点を調査し、商品成立の諸元を決定する研究のためであった。市場ニーズに応えることのない、商品として成立し得ない製品のデザインはあり得ないのである。

かなり前の「日経デザイン」の調査でも産業界では、デザイナーに求められる能力として従来の産業工芸の狭い考え方でなく、それを超えて市場ニーズを解明し、新たな製品を開発するデザイン開発力が重要なものとしてあげられている。そしてデザインに求められるものとして、美的造形能力は勿論のこと、経営、生産、流通、ライフ・スタイル、環境、福祉等と直接かかわる総合的デザインの能力の重要性が広く認識されているのである。しかしながら地方では産業界ばかりでなく、大学においてさえも、こうしたデザイン能力の重要性は未だによく理解されておらず、ギャップが大きいのが実情である。

こうした認識があったので通産省当時、地方産業の独

自製品開発による活性化をはかるべく『地方産業デザイン開発事業』を立ち上げ、その初年度にこの事業を山中漆器組合で実施した。その後は海外赴任したこともあり、成果を確認したのは高岡短大に来てからのことであったが、山中漆器組合は事業実施当時の昭和51年の産額200億円から、50年代末の500億円の産地に発展していたのである。

この事業が直接という訳ではないにしても、私が高岡短大に関わる動機になったのは、それは、このデザイン開発事業を進めるに当たって直面した人材難であった。かろうじて数少ないデザイン事務所を探し出したが、美的造形能力をもつデザイナーはいても、それだけではこうした事業には役立たない。カゴメ・ケチャップが何億円もの費用をかけて行ったパッケージ・デザインの開発に失敗した話は有名で、如何に美しい形を作ることができて、そのみでは不十分なのである。適切な市場情報を得る能力、それを新しい時代、市場のニーズに適った独自の製品に纏め上げる能力、またその事業を推進し得るマネジメント能力のある人材育成の必要性が明らかになったのである。

実際、市場情報を如何に入手するかという事は今日では何処の企業でも重要問題で、とりわけ産業界でデザイナーに求められている能力である。けれどもこれは旧来の図案や美術工芸の学校教育では勿論、産業工芸科でさえも教えられてはいない。美術科で経営や市場調査の方法を付加的に教えるといった話ではなく、求められてい

るのは総合能力の育成であり、ここに産業デザイン学科独立の必要性があったのである。また、この総合的なデザイン能力を育成するに当たっては、短期大学では科目数の上からも困難な事は最初から明らかで、四年制化が望めないなら専攻科の設置には何等論議の余地もなかった。コンピューターが導入されるに及んでは、全くこれは理の当然であった。

バブル崩壊後の今日、構造改革の名の下に下請け事業の海外移転が進められ、市場には安価な輸入品があふれる反面、産地問屋は疲弊し、優れた専門的加工技術を持ちながら、市場調査能力も製品企画力も開発資金もなく、仕事もない産業が増加して空洞化が進んでいる。最近、独自の技術をもった異業種の中小企業のグループが幾つか、各地で新製品開発に乗り出した話を聞いて、やや慰められる思いである。

高岡短大の産業デザインにいた頃、新しい教育の意欲

もあり、優れた指導力もあった南塚豊さんは残念ながら志半ばに亡くなってしまわれたが、学生の総合デザイン力を如何に育てるか、毎夜のように共に議論を重ね、次々と実行に移したことを思い出す。そのゆえあってか短大とはいえ、毎年開催される DAS/毎日新聞社主催の全国大学学生デザイン・コンクールでは他の四年制芸術大学に伍して常に入賞を果たし、学校の知名度を高めることもできた。また地域の企業には自信をもって卒業生達を送り出し、実社会で大いに成果をあげたこと、そして乏しいマン・パワーの力不足はやむを得なかったとはいえ、地域の地場産業の人々を対象にした新製品開発公開講座も、いまだに誇らしい思い出である。

「小さいけれども、特色ある珠玉のような大学でありたい。」開学当時の将来構想検討委員会座長の島田副学長の言葉を思い出す。

## 回想の断片

私は縁あって昭和61年4月に本学の教員に採用された。その年本学は第1回の学生を受け入れた。晴天に恵まれたがまだ少し肌寒い入学式当日、大学正面入り口付近で記念写真を撮った時の教職員と学生の表情は晴れ晴れとして明るかった。

なにからなにまで真新しい環境のなかで授業が始まった。新しい黒板はチョークが乗らず、字を書くとキーキー音をたてた。私は若い学生の前で授業をするのが楽しかった。

当時まだ校舎は建設途上で体育館も図書館も無かった。私は在職した14年間に体育館、図書館、専攻科棟、更に非常勤講師宿泊施設等の建設工事がしだいに進むのを研究棟の4階の窓からよく眺めたものだ。

ある時、今は亡き横山保初代学長が教職員を対象に通信技術の将来展望について講演をされたことがあった。ずいぶん専門的な内容でよく分からなかったが、素人考えの私には自分の周辺でそんなに急速な情報通信の進展があるとは思えなかった。その頃いわゆるケータイさえもまだ無かった。インターネットということばも知らなかった。情報通信革命の時代が遠い将来にいずれやってくるとは漠然と思っていた。しかし今振り返ってみると

私たちは間もなくその時代の波に洗われたのである。学内 LAN が整備され、諸連絡や情報交換が学内ネットの利用で可能になったのは私にとって新鮮な経験だった。自分の研究資料をインターネットで収集することも覚えた。海外の外国人の知己に頼んで、英米コースの学生のインターネット英文通信の相手になってもらうことも試みた。パソコンの誤操作で専門家の同僚に助けってもらうこともしばしばずいぶん迷惑をかけた。

平成7年にテレビによる放送公開講座の実施の順番が英米コースに回ってきた。できるなら辞退したい気持ちだった。関係者で9回シリーズのテーマを決め、各回の内容を検討し、担当者間及び放送局側との調整、外国人協力者への依頼などにいささか苦労した。私自身は収録の始まる前の7月、8月は毎週土、日全部を研究室で台本の作成に当てなければならなかった。9回の放送が終わって「やれやれ」という気持ちだった。準備のための時間不足で出来具合に不満な点もあったが、出演をお願いした当時の宮本匡章学長、直接の担当者及び事業課のご協力の御蔭で無事に終了できたのはありがたかった。

故蠟山昌一学長が本学の教育課程改革の本格的作業が始まる直前だったと思うが、私たち宛の文書のなかで富



名誉教授 林 暢夫

山大学との併合の可能性を示唆されたことがあった。大学の再編・統合が広く話題になるかなり前のことである。大学の生き残りが叫ばれるなか、それは私たちにある種の危機感を伝えるためだったろうが、当時の私には愚かにもあまり現実感が無かった。こんど本学が富山大学と再編・統合のうえ、新しく芸術文化学部として生まれ変わるようになったが、本学開学時には夢にも考えら

れなかつただろう。時代は変わると言うことしきりである。ともかく新しい学部の今後の発展を心から祈るばかりである。

私は本学に14年お世話になったが、すぐれた教職員の方々に助けられて勤めることができたのは大きな幸運であった。深く感謝したい。

## 漆への挑戦

本学創設の経緯は「高岡短期大学十年史」(平成6年3月発行)に詳しいが、開学は昭和58年(1983年)10月1日であり、同61年4月15日に第一回の入学式が挙行された。

小生に短大が高岡に設置されるので協力してくれないかとの話があったのは59年頃でなかったかと思う。61年の入学時に予定されていた化学系の授業科目は、一般教育科目では「化学」、専門教育科目では「高分子材質学」「接着理論」「化学塗料学」であった。これらの授業は担当できると考えて応諾した。

当時、在籍していた大学での担当授業科目は「有機化学」「高分子化学」、授業に関連する「演習」「実験」「実技(ガラス細工等)」であった。しかし、研究の主題目は「付加縮合樹脂の基礎と応用研究(小生個人のテーマ)」「有機スズ化合物の新規合成と利用研究」(研究室のテーマ)であった。

だから、大学から配属先が内示されたのを見て驚いた。漆専攻になっていた。当時、漆の学術的なことはほとんど知らなかったのである。いまさら辞退もできず、新分野に取り組むことにした。

漆の研究を開始するにあって、どんな研究が行われてきたか、どんな研究が必要なのかを知る必要があった。そこで「漆の化学」に関する文献調査を開始したが、その研究の歴史の古さと膨大さに驚いた。明治15年(1882年)英国学会誌に掲載された日本人 SADAMA ISHIMATSU の論文が最初であり、翌16年には HIKOROKU YOSHIDA の論文が J. Chem. Soc. に共に英文で掲載されていて、明治の人の心意気を感じた。その後も、多くの先達が続々と内外の学術雑誌に発表されていた。小生が在任中に英国留学した J. H. P. Tyman 教授もこのと

き知った。とにかく、赴任は61年からとなっていたが、とても準備期間が足りず62年に変更していただき文献調査に没頭した。

着任後、漆の実験を開始。「かぶれ」予防のために手術用手袋をして行ったが、実験器具等を扱うには不便であった。そこで、手に付いても洗い流せる「かぶれ予防液」を考案した。この液の調製法は学会誌にも掲載された。また、漆の学生の実技室等にも常備し、いつでも使用出来るようにした。

退職後、残務整理もほぼ終わり自宅で漆の最大の弱点とされる対候性実験を細々と続行している。

名誉教授 蜷川 彰



(似顔絵の説明；退職時、漆の在校生全員からなる寄せ書き集「蜷川先生への手紙」と題する冊子を頂いた。小生へはなむけの言葉が籠められていた。また、言葉とともにイラストも多く描かれていた。似顔絵はそのなかの一枚です。)

## 最も残酷な月



名誉教授 中野清治

大学の英語教員をしていて、心に一番重くのしかかる月は2月であった。学年末の繁忙に加え、入試の採点の仕事があったからである。以下は入試にまつわる思い出である。

新学年の慌しい一連の行事を終えて一息つくと、もう来年の入試に使う英文、つまり内容的にまとまっておらず、難易度、分量などで適切な候補文探しが始まる。学長から入試問題作成委員の委嘱を正式に受けるのはずっと後のことであるから、出過ぎたことには違いないが、平成17年度センター試験の国語の問題で生じたように、意図的ではないにしても結果的に受験生を不公平に扱ったことになるというような例は過去に幾らもある。問題文を慎重に選ぶということはそれだけ時間がかかるということなのである。また果たさなければならない他の責務(授業、各種委員会の出席、公開講座のテキスト作り等)や以後のスケジュールを考えれば先走っておくに越したことはない。

問題作成の過程を詳細にのべることは憚られるので、触れないことにする。ただこの点で言い忘れてはならないことがいくつかある。まず誤植がないようにすること、また受験生に誤解を与えないよう、解答方式を指示する日本語の表現に細心の注意を払うことである。さらに形式の面でも、例えば解答用紙のスペースの配分や番号・記号が問題冊子のそれらに間違いなく照応するように、念には念をいれ、厳密・細心の検討を加えた。印刷所から刷り上げてきたゲラを校正するのは時間をおいてすべてを客観的に眺めるのに役立った。おかげで今に至るまで、入試最中に訂正箇所を知らせるために連絡係が各教室を走り回るということは一度もなかった。

面接では緊張のあまり言葉が出てこなくなる受験生がいる。口下手であるほどこちらが気をつかう。面接官としてはできるだけ相手の緊張をほぐそうとして打ち解けた話し方をしてみたり、相手を傷つけまいとして言葉を選ぶ努力をする。言葉だけの問題ではない。尋ねる内容そのものも受験生が得意とする分野にふって、元気な反応が返ってくるのを期待する。あれやこれやで結構疲れる。2日間の面接終了時にはぐったりである。

採点業務で忘れられないのは第1期生に関わるそれである。採点に携わったのは、私の記憶では、問題作成に関わった富山大学の英語担当教官2人と、本学着任予定の村上恭子先生、そして富山商船高専の教員をしていた私であった。部外者だけなのは本学に正規の英語教員はまだ一人もいなかったからである。高岡市にあった旧富山大学工学部(同学部は前年の昭和60年に富山市へ移転が完了して校舎だけが残っていた。その敷地に現在高岡高校が建っている)の一室で、昭和61年2月24、25日の二日間にわたって、それまで経験したことのない大量の答案と組み討ちをした。競争倍率が高いだけに優秀な生徒が受験しているな、というのが採点しながら受けた印象である。

開学後の数年間は受験者が多く、調べる答案の枚数の多さに辟易した。採点初日、前日の面接の疲れも忘れて好調なスタートを切るのだが、時間の経過とともに答案をめくる間隔が乱れてくる。他の採点者も同様である。こつこつと行なう単調で骨の折れる仕事のことを drudgery というが、入試の採点は正に drudgery である。2日目の午後ともなると、答案を数枚めくるごとに天井を仰いでため息をついたり、窓外にぼんやりと目をやったりと、作業は遅々として進まなくなる。そうこうしながらも夕方ごろになると合計点を記入する作業に入ってくる。この段階までくれば先が見えてくるので、俄然元気が出てくるから不思議である。

作問のところでも述べたが、採点作業においても厳正を旨とし、細心な念査を繰り返した。解答用紙の各綴冊の表紙には、作業担当者がサインするための紙が貼ってあり、各問の採点および点数の記入者・その点検者、合計点の記入者・その点検者が、各作業終了ごとに該当欄に署名することになっていた。厳正の上にも厳正を要求される入試においては、複数の採点者の目でチェックすることは欠かせない作業なのである。

英国の文人 T. S. Eliot は “April is the cruellest month,” (米国式綴りでは cruelest—こういう但し書きをつけるのが英語教師の悲しい性)と詠んだが、筆者にとっては2月こそ「最も残酷な月」だった。

## 学生と共に



名誉教授 林 哲三

「光陰矢の如し」時の過ぎ去ることが思いのほか早く感じるたえとして使われています。

私が、昭和62年4月に高岡短期大学の教官として奉職し、平成16年3月退職するまでの17年間、今思うとあっという間に過ぎてしまった感があります。

昨日まで自宅で木工制作の仕事をしていた者が今日は若い学生の前でものづくりについて講義をしている、まさに「晴天のへきれき」という出来事でした。

新入生は木材工芸専攻希望とはいえ、木というものがどのような性質を持ったものか、また工芸とは何かほとんど知らない状態です。まあ、それを勉強するために入学してきたわけですが。

私も今まで人に木について、ものづくりについて教えた経験がなく、果たしてやれるのか当初の頃は、「暗中模索」という状態の毎日でした。

まず講義や実習を行う前に授業をどのように組み立てて進めて行けばよいのか解らない、所謂シラバスづくりが問題でした。誰に聞いてもあなたのやりたい様に考えてやってくださいという回答ばかりでした。

私は困ってしまい、そこで自分では何ができるかを考えました。その結果これまで木材を使って制作してきた経験を生かして行うしかない。講義では話だけでなく実物を見せたりまた現状を見に行くこと、実習ではものづくりの基本の技をやって見せること、学生はそれを見てそして自ら体験することによりさらに深く理解でき学べるのではないか。

このことは私の授業の根幹として17年間一貫して行ってきたことです。そしてこれを実行するには私のそれまでの知識と経験では到底間に合わないことに気付き、自分も学生と共に、いやそれ以上に勉強をしなければならぬ破目になりました。そして担当授業のシラバスには必ず一回以上の学外実習を計画し、学生と一緒に出かけました。

このときほど、みんなの顔が生き生きしていたことが印象深く思い出されます。教室での一方的な話しではなく、世間話をしながら市場調査や資料収集を行う、学生の普段見せない態度や本音の話しなどに驚かされたこともしばしばありました。そして若者がどのようなことを考え、何に興味を持っているのか知る機会でもあり、ま

た昼食時にレストランで皆と一緒に食事をするのも私の楽しみの一つでした。さらに井波、庄川への産地見学や研修旅行も楽しく有意義な授業でした。

もう一つ私にとって忘れられない行事は、毎年続けてきた「ろくろ祭り」です。

当初、産業工芸学科の各専攻で、「…まつり」なるものが行われていました。

木材工芸専攻では「ろくろ祭り」と称し、学生主体で食物を準備し、そして食べながら皆で語り合う行事です。

「ろくろ」という事で、私に関わるようになり現在も続けています。このことは普段の授業ではなかなかできない内容だと思います。

日本に古来より伝えられた、ものづくりの根源である精神や道具、素材に対して崇める心を儀式というかたちを通して現し、示すことは純粋に考えて大切なことだと思います。すべてのものが、我々の祖先から連綿と受け継がれて、今日あるわけです。

思い出せば数限りなく切りがありません。高岡短大の17年間は私の生涯にとって重要な一ページであり、この間に若者から貰ったパワーや貴重な経験や体験は私の貴重な財産になりました。今後の人生に生かして制作に励んでいきたいと思っています。ありがとうございました。



## コラボレーションに明け暮れた日々をもう一度

元産業情報学科助教授 小郷直言

高岡短期大学を離れ、はや10年あまりになりました。だんだんと記憶を呼び覚まさないほど遠くになってしまったのでしょうか。辛かったこと、大変だったことは意外に少なく、充実した日々、楽しかった出来事の方が思い出として多く残ります。しかし、思い出として高岡短期大学を回想するということが以上に、現在の自分に通じる研究の基本的考え方、大学における職務についての関わり方の多くは、高岡短期大学に在職していた期間に築けたものと思っております。それと同時に今は感謝の気持ちでいっぱいです。

総合大学の学部学科に所属していますと、その中での活動は外部に開かれることは少なく、多くが閉じてしまい、自分に近い専門家、学生との関係が中心となります。良きにつけ悪きにつけ、高岡短期大学は大学全体でも、総合大学の一つの学部ぐらいの規模しかありません。当然のごとく最初、業務はそれまで経験したことがないほど山積みされ、研究上、教育上、職務上で密に接触する人々の履歴、職歴、職位も様々で、阿吽の呼吸は通じず、飛んでくる火の粉も払えず、無関心も許されない、という気の滅入る思いがしたものです。しかし、よくできたもので、当時雑事と割り切り腰を引いて関わってきた事も、繰り返しによる慣れと、気の持ちようで、私に多少の関わりへの積極性と異文化コラボレーションを楽しむゆとりとが醸成されてきました。

この影響は自分の研究面にもすぐに現れてきました。大学の規模、学生数、教えるべき内容などからして過大といえるコンピュータ設備は、恵まれてはいるが同時に設備の稼働率や教科内容面からもシステム管理上負担な存在ともなっていた。何とかコンピュータ資源の有効利用はできないものかと考えを絞っていたが、そんななか当時技官であったシステム管理者の米川覚氏と共同で「もんじゅ」というソフトウェアシステムをホストコンピュータ上に構築して、TSSにあった共同利用学習環境を学生に提供しようと努力しました。現在では当たり前になりつつありますが、当時として学習にグループウェアを利用した新しい学習環境でした。数年にわたり深夜までシステム開発の共同作業を二人で続けたのを覚えています。若かったこともあります研究とシステム

開発に夢中で没頭できたことを今では懐かしく思います。このシステムに対して京都の国際会議場で賞を頂いたことが二人の誇りです。

もう一つのコラボレーションは、分野も育った環境もまるで異なる木材工芸専攻の小松研治氏との出会いであった。一年間留学されたスウェーデンから帰国され、滞在されたカペラ・ゴーデン美術工芸学校での体験を文章化するお手伝いをする過程で様々な話題を話す内に、分野が違っても通じ合うことが多くあることの発見は実に驚くべき体験でした。これは貴重であったと同時に、その後の私の思考やものの見方の重要な転換点となりました。驚きはこれまで読んできた自身にとっての重要ではあったが少なからず距離があった人物の書籍が、新たな光の下でより明晰に理解できるようになっていったことです。これは一人で読み、解釈していたのでは決して得られない次元での感動 eureka! をわたしに与えてくれました。1 ページ読むごとに自分の解釈を伝え、彼の返事、返答からさらにあらたに読返し、再考し、再度解釈を質すということをそれこそ際限なく何年も続けてきています。この間二人で書いた多くの論文が、いま自分の財産となっています。偉人として再登場した人物には F. W. Taylor, K. Marx, G. Ryle, R. Gregory, J. J. Gibson, 田中美知太郎, L. S. Vygotsky, D. A. Norman がいます。

名前はなくなるかもしれませんが、すばらしいコラボレーション環境である高岡短期大学のキャンパスに期待することは、学習の資源として人工物環境への視点移動が、個人中心の学習概念から脱中心化させてくれ、知識の外在主義的な見方から学習・研究環境を重視する突破口になるんだ、ということでしょうか。

初代横山保学長、第2代宮本匡章学長、第3代蠟山昌一学長は大阪大学経済学部をそれぞれの分野で現在の名誉ある学部にて育て上げられた重鎮であります。幸にもわたしは大阪大学経済学部、さらに大学院経済学研究科の学生として、横山先生、宮本先生に直接指導を受けました。とくに横山先生は指導教官であり、その故もあって富山大学にいた私を短大に導いてくださいました。富山大学に創設準備室があったときから大学が創設される一

部始終を脇から観察させていただき、少しばかりのお手伝いできたことは、今から思えば希有な体験であったと思います。自身の病状悪化への危惧から横山先生は、短大の将来を託すべき唯一の人物として宮本先生を推薦されました。

私は二人の恩師の下で仕事ができることをこの上もな

く感謝しております。期待に答えられるほどの力量を持たない私に大学の運営と教育研究機関としての厳しさ、自由度から発する熱意と誠意を教えてくださいました。人生の重要な時期を高岡短期大学で過ごし、よき恩師と同僚に巡り会えた幸運を感謝せずにはおれません。

## 回想—坂川幸雄先生

坂川幸雄先生は、富山県公害センター(現 富山県環境科学センター)所長、富山県工業技術センター所長などの要職を経られたのち、昭和61年9月に本学教授・開放センターの初代センター主任として着任されました。当時の開放センターは61年4月に発足したばかりで、地域貢献のための大学開放事業を文字どおりゼロから構想・立案していく状態でしたが、坂川先生はその中心としてご活躍されました。特に、行政機関・地元団体との連携、公開講座の共催依頼と広報などの対外的な交渉の際には、先生が長年培われた人脈が生かされ、多くの事業をスムーズに運ぶことができました。

授業担当科目「環境科学」は、毎回の講義は詳細なレジュメと多数のスライドによる充実した内容で、毎年100名程度が受講する人気講座でした。また、研究面では、放送教育開発センター(現 メディア教育開発センター)研究協力者として、通信衛星・CATV 網を用いた双方向遠隔教育システムの研究や、放送公開講座における効果的な映像提示などの遠隔教育に関する実践的な研究を推進されました。



(故)坂川幸雄先生

先生は誰に対しても温厚な態度で接しられ、泰然と物事に臨まれる様子が印象的でした。私は平成3年に赴任し、当時は右も左もわからず戸惑うことも多かったので

## 地域ビジネス学科助教授 藤田徹也

すが、先生には一から丁寧にご助言・ご指導をいただきました。また、開放センターの業務だけでなく研究もできるよう、教官室の使用を促されるなど、数々の面でご配慮をいただき感謝しております。暑気払い・忘年会など事業課のみなさんとの会食の機会も多かったのですが、カラオケでお得意のレパートリーを披露されるなど、とても楽しそうにしておられていたのを覚えています。

折に触れて、お子様方の成長を嬉しそうに語られ、また、定年退官後にゆっくりできることを楽しみにしておられました。しかし、平成4年の秋頃から体調を崩され、入院されることになりました。病室では気丈に振る舞われていましたが、病状は悪化し、平成5年8月に惜しくもご逝去されました。葬儀の日、勝興寺の空は青く、とても暑い日でした。ただただ無念さだけが募る一日でした。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



## 回想—南塚先生

産業デザイン学科助教授 矢口忠憲

南塚先生と初めてお会いしたのは、早春の頃、私が採用面接の為に来学した日のことです。その時は緊張していたこともあり話しの内容などはよく覚えていませんが、それから数週間が過ぎ採用が承認された時、先生が私の会社へ割愛願ひに出向いて下さり、私の上司に対してこれまでの経緯とデザイン教育の重要性、私の必要性（これに関しては困難であったと思う）を熱く語って下さったことは強く印象に残っています。その後、大学を見学する為に二人で私の車に乗り名古屋から高岡に向う道中色々な話しをしたことも思い出されます。互いが同郷で、金沢美大の同窓であったことから共通の話題も多く、話しが尽きることはありませんでした。大学に着いたからも、学内を回りながら色々なお話を聞かせて頂き、新たなスタートに胸膨らんだことを記憶しています。

何よりも南塚先生が教育熱心な方であったことは、誰もが知るところです。学生の間では、親しみを込めて「ナンチャン」と呼ばれ、先生も時折「ナンチャッテ〇〇」「ナンにもデナイナー」などと冗談まじりに答えておられました。（当時を回想するにあたり、以後南塚先生のことをナンチャンと記させていただきます）真新しい校舎でまだ十分に設備等が整っていなかった頃（昭和61年）、第1期生を迎え入れました。各方面から集結した教官陣にとっても、全てが初めての経験であり、戸惑いながら奮闘していたそうです。その折りも、持ち前の明るさと長年の高等学校の教諭経験を生かし、先頭に立って学生指導にあたっておられました。また学生のみならず、私たち他の教官にも今までの事例などを交えて、学生心理や指導方法などを熱く語って下さいました。

卒業制作の時期は、1年生の締めとなる実習授業と重なることもあって、私たちも学生達と同じように夜遅くまで学校に残り全員体制で指導にあたっていました。終盤に近づいてくると、私たちの朝1番の仕事は、雑然とした実技室の片隅で毛布やエアークャップに蹲っている徹夜組の学生を起こすことから始まります。思考能力が低下している学生に今日のスケジュールを再確認させ、段取りをこちらが組んで指示する。その後は定期的に、脱線していないか、間違っていないかをチェックするため、実技室やモデリングルームなどを巡回する毎日でした。そんな中、ナンチャンは何時も、口癖であった「説

得ではなく、納得だ」の如く、必ず学生の主体性を尊重し、あくまでも学生自身が充分納得した上で作業が進められるよう、配慮して指導されていました。この考えはデザイン専攻全員の教官にも共通しておりましたので、学生とは膝を突き合わせてとことん話し合いをしたものです。互いに真剣であったが故に、時折思い悩み感極まって泣き出す学生もいましたが、その様なプロセス（体験）があったからこそ、自信を持って社会に羽ばたいていけたのでしょし、現在もそれぞれの現場で頑張ってくれているのだと思っています。

当時は、卒業式の後に卒業生が教官を労うために一席用意してくれ、そこで学生一人一人が順番に2年間を振り返って一言語ることが恒例となっていました。将来の夢を語る者、友達への想いを語る者、辛かったことや悲しかったこと、楽しかったことを振り返る者、先生への感謝を述べる者など様々でしたが、何れの学生も終わりのほうになると涙して言葉に詰まっていました。全員が涙している中、最後の締めは何時も小関先生の「よ・よ・よ・い一本締め」とナンチャンの「万歳三唱」でした。あの一体感と達成感、今や幻となりつつありますが、その香りくらいは今も継承されているものと信じたいです。



卒業式の後の専攻謝恩会の席にて

ナンチャンの専門は、分野としてはプロダクトデザインでしたが、高校教諭時代より、デザイン基礎教育、発想法の研究を主たるテーマにされていました。色々な発想法を研究される中、辿り着いたのが市川亀久彌先生の等価変換理論だったと聞いていました。その理論に今までの御自身の考えを組み合わせ、デザイン教育における発想法として理論構築されました。本学では「トランスフォーメーション」と名付けられ独自の授業として開講

されていました。この授業は、就職先などでも高く評価され、本学の特長ある授業の一つとして受け継がれています。現在は私が、これらの授業を担当しているわけで

すが、どのくらいナンチャンの意志を伝えられているかは自信がありません。何とか進化させ、今後も継承していきたいと思っています。

## 卒業生の回想

### 回想

金属工芸専攻 平成2年卒業  
伊藤良治

私は昭和六十三年、産業工芸学科金属工芸専攻の第三期生として入学しました。

校舎は出来たばかりで美しく、先生方と一・二期生の先輩方のおかげで設備も整い、とても恵まれた環境で学生生活を送ることが出来ました。

金工の仕事はほとんどが始めて経験することばかりで、危険な作業も多かった事もあり、良い緊張感と刺激のある毎日でした。また先生方の仕事に対する厳しい姿勢が、何よりも一番の勉強になりました。特に、須賀松園・麻生三郎両先生から直接ご指導をお受けできたことはとても幸せな事だったと思います。

また、金工は何かと皆で集まっては飲む機会の多い(短大生ですが、三期生は二十歳以上の多いクラスでした)科でした。鞆まつりや鑄込みの後の後吹き等々、先生や先輩・後輩と土間や作業場に集まって騒いだことは今でも懐かしい思い出として心に強く残っています。そのおかげで、私達はいざという時には、皆で力を合わせてまとまる事が出来たのだと思います。



今は皆それぞれの道に進み、金工を続けている者、全く別の仕事をしている者といろいろですが、短大で教わった多くの事を生かしてがんばっています。私もあの頃の緊張感を忘れず、高岡短大の卒業生として恥ずかしくない仕事をしていきたいと思っています。

### 回想

経営実務専攻 平成2年卒業  
山本美智恵(旧姓 室谷)

私は第3期生として入学しました。先生方やクラスメイトと出会い、新たな世界が広がりました。たくさん話して笑って泣いて悩んで。ボーッとしたり、一生懸命だったり。私にとってはぜいたくで、濃密で、宝物のような2年間でした。

私たちが簿記会計の授業を受けている真下の教室では、工芸科の学生がモデルを前にデッサンしている…全く色の感じが違う授業が、同じ校内で行われていることがとても新鮮で不思議でした。時々感じられる、漆や木の香り、チェーンという金属音もとても興味深くて心地よいものでした。



平成元年8月 バasketボール部合宿中スイカを食べて種とばしをしているところ。

それから、部活動も忘れられない思い出のひとつです。縁あってバasketボール部に入部。仲間、先輩、後輩、そして人生相談にものって下さった加藤敏弘先生。体育館を走り、筋トレをし、ボールを追う。合宿、遠征、文集づくりに金魚救出作戦。あんなに体も心も動かししたのは初めてでした。

2年という月日は、あまりにも早く短いものでした。やっと慣れ親しみ、これからもっとおもしろくなっていきそうなのに。そんな風に感じられ、卒業時は残念でし

た。あれから約15年。高短生がデザインした万葉線車両、氷見の商店・企業の広告を見かけたりすると、何ともうれしく誇らしいです。“高短”の名がなくなってしまうのは淋しいですが、さらなる発展につながるものと信じて、応援しています。関係者の皆様の幸せを祈っています。

**現況** 高短の前を車で通ると、食堂に行きたい気持ちでいっぱいになります。子育て、自分育て等、日々修行!の毎日です。



## 卒業後の私

情報処理専攻 平成3年卒業  
堀野幸一

情報処理専攻を卒業して14年近くが過ぎました。長い歳月の中で、私は3度の転職を経験しました。正直なところ、社会人として就職に対する認識が甘かったのかもしれない。挫折を繰り返す自分を見つめ直すために短大の創己祭に何度か足を運んだ事もありました。現在は学校技士として働いていますが、それまでの3年間の紆余曲折は自分にとって貴重な人生勉強だったように思います。大学時代、毎日机上でコンピュータと向き合っ

いた自分からは想像もつかない程、今はコンピュータを使っていません。同じ場所でじっとしている仕事でもなく、常に職場内を動き回っています。学校技士は施設の維持や修繕を進めながら、園芸や木工作业もおこないます。11年目になりますが仕事に対する情熱はいまでも変わりません。はつらつとした子供達に囲まれながら自らが創造したものを形にし、学校環境を整えていくところにとっても魅力を感じています。自分の働く姿が成長過程の子供達や市民の日に映る事で緊張やプレッシャーを感じる事もたまたまありました。しかし、子供達や先生方そして家族の温かい励ましに支えられながら、今日まで続けていくことができました。大学時代に肌で感じた「創己」の精神をいつまでも持ち続け、日々努力していきたいと思います。

**略歴** 平成元年4月 高岡短期大学産業情報学科情報処理専攻入学 3年3月 高岡短期大学産業情報学科情報処理専攻卒業 6年5月 富山市職員に採用 17年2月 現在に至る。**現況** 富山市職員として小学校に勤務しています。元気いっぱいの子供達に囲まれながら、よりよい環境づくりと施設維持に努めております。

## 回 想

産業デザイン専攻 平成2年卒業  
岡本博美(旧姓 牧野)

私たち産業デザイン3期生(以後産デと表記)のクラスは、先生方も含め、とても仲が良かったと思う。高岡短大に入ってまず一番印象に残った出来事。それは新入生歓迎会という場に先生も登場され、一緒になってお酒を酌み交わすということ。小・中・高校時代はまず考えられない。『先生』というのは上の立場の人で、生徒に難癖つけて叱るのが仕事だと思っていたので、いきなり隣に座って大酒飲む先生もいるんだーと、軽いカルチャーショック。その後も何かにつけ宴席が設けられ、用事がない限り必ず先生方も出席してくれていた。しかも、生徒をぶっちぎりでよく飲む。産デの先生になるには、飲酒テストがあるのかと思うぐらい、酒豪揃いだった。



授業内容もユニーク。個性的で型にはまらない斬新な課題が次々ふってくる。小学校の時「毎日木工の時間ならいいのに」と思っていたことが現実になったんだから、楽しくってしょうがない。その

割によくさぼって単位ギリギリだったけど、まあ今となってはいい思い出。

卒業してからも何かとちょくちょく顔を出し、現在に至るまでお世話になり続けている。その『高岡短大』の名称が消えるのはとても寂しい限り。それでも私の中では長い学生時代の中で一番思い出深く、誇りに思う学校であることは、これからも変わらない。

**略歴** 平成2年 国立高岡短期大学産業デザイン学科卒業。広告代理店のデザイン部門に就職 7年 友人と二人でデザイン会社『シード』を起こす。11年 散居村にある、小高い丘の上の大きな一軒家に引っ越す。年に数回、この広いスペースを利用してJazzライブを行う。13年 自宅の横にある広い倉庫を利用して、子供のための創作教室を開校。14年 デザインの仕事をする傍ら、色彩心理学博士・末永蒼生氏主宰の色彩学校のコースに通い、『チャイルドアートインストラクター』の資格を取得。

広告企画工房シード/代表 岡本博美

わんぱくアトリエシード/チャイルドアートインストラクター

e-mail: sead@p1.tcnnet.jp http://www.tcnnet.jp/sead/

## 先生達と工芸棟

木材工芸専攻 平成3年卒業  
本多一郎

木材工芸専攻で過した二年間、小中の義務教育及び、その延長線上のような高校の時には思いもよらない事ばかりだった。先生達はそれぞれの生きざまを見せてくれた。木材の先生達に限っても、皆、我が道を歩いてきた確固たる信念の持ち主ばかり、学生目から見ても意見を闘わせている先生方の雰囲気を感じることができた。

理論と実践、構造と形態、作為の無作為による自己表現と、決められた寸法世界における自己表現、技術力と創造力……先生方の信念のぶつかり合いを垣間見ること世の中の縮図を感じることができた気がする。

迷いもあったが、木材工芸にたどり着いた一年目。研ぎに明け暮れた夏を過ぎて、後悔はなかった。ここでしか知り得なかった世界、有り得なかった出会い。振り返っても自分にとっての一つの歴史がそこにある。

書ききれない思い出があるが、詩?を一つ。

「工芸棟の風」

工芸棟には風が吹いていた。

我が木材工芸と、クロスする金属工芸。

金属の槌音、木材の刻み音。カッシャーと金属の雷神様、ヒュウウーヴォーンと木材の集塵機の風神様。

工芸棟には、よい風が吹いていた。

木材の機械室にいれば漆やデザインからの微風も感じられた。工芸棟は風の強い場所だった。

若き風のいきかう、今は心の中の思い出。

**略歴** 卒業後、立山町森林組合へ就職合併により、立山山麓森林組合職員 現在に至る





## 回想

専攻科 地域産業専攻  
平成4年修了  
田中早苗(旧姓 遠藤)

私が高岡短大に在籍していたのは3年間でした。朝から晩まで一日の殆どを学校で過ごし、作るという事の面白さや難しさに触れました。この経験が私には忘れられず、卒業後も漆に関わる仕事に就きましたが、あの頃ほど夢中に取り組むことはなかなか難しいと感じています。とても自由で恵まれた環境の中にいたのだということを実感します。

また、その中で沢山の大切な出会いがありました。もう会うことは叶いませんが、とても大切な恩師にも巡り会えました。いつもは冗談ばかり言う先生でしたが本当に困った時には親身になって導いて下さいました。行き詰まったときには今でもよく先生の話してくれた事を思い出します。先生との思い出はきっと多くの方の心にも鮮やかに残っていることでしょう。

沢山の友達にも恵まれました。楽しい事も辛い事も一緒に味わった仲間は私にとって家族のようであり、いつも私を支えてくれています。

たった3年という短い時間でしたが、その値はとても

大きく、この先の人生にも大きな力となってくれる事と思います。

略歴 昭和45年神奈川県横浜市生まれ 平成4年 高岡短期大学専攻科卒業 8年 日本橋 TOMMY 画廊にてグループ展 9～11年 横山幸文氏に師事、富山県展奨励賞受賞 12年 山田平安堂にてグループ展(東京) 13年 天下堂ギャラリーにてグループ展(富山)、卯辰山工芸工房入所、高岡クラフトコンペ入選、ギャラリー葉っぱにてミニ個展 15年～ 自宅兼工房にて作品製作



## 『ロードゴーイングトリップ・ザ・青春』

産業デザイン専攻 平成5年卒業  
瀧澤 理

この間、東京在中の山口君(産デ6期卒、現グラフィックデザイン事務所青山表参道勤務)が引越すから手伝いに来てとムズカルわが息子とまた遊び?と冷やかな目の嫁に別れをつけ、どうやってこの状態から今日明日引越しを終わらす気なのだろうかこの人はという山口君32歳の自宅に入ったオレの動揺も察することなく、満面の笑顔で「すげえのが出てきたケラケラケラ」とまるで少年のような瞳で一冊の日に焼けたボロ大学ノートを差

し出した。それは僕たちが大学二年の夏休みにいった初めての長旅の記録ノートだった。山本敬君(木材6期、現本人曰くフリーの建築家)と僕の3人で鈴鹿で行われる鈴鹿8時間耐久オートバイのレースを見に行く2泊3日の強行軍ツアー。クルマ一台で行けばよいのに、バイクで無いと駄目だと訳のわからん理屈をこねてバイク1台クルマ1台で下道のみ宿無しテント無しで行った旅日記を誤字脱字ひらがなそのままの文でご紹介いたします。(良)山口良一(敬)山本敬(瀧)瀧澤理

#### 7/25(土)初日

出発

AM 3 : 00 ジジババの店前。敬と合流(瀧)

AM 3 : 04 吉野家でめし(瀧)

AM 3 : 23 吉野家、出発。マスターと合う。敬つまようじさかさまにつかうやっぱり頭が悪い(瀧)

AM 3 : 36 ふくおかのGS宇佐美で敬給油。1000円金をかしてくれという。あいつは全財産2000円だといったなんてバカなんだろう(瀧)

AM 4 : 12 敬の家(注:金沢の実家)到着。第1目標無事達成。(良)

AM 4 : 30 父母と涙の再会。オレって頭わるいが方の二人のわるい by 敬 PS ちょっと首が痛い(敬)←字が違う“他”やっぱりだら(瀧)

AM 4 : 44 敬実家出発。敬のお母さんありがとう(瀧)

AM 5 : 22 ローソン矢崎店で休けい。小松はすぎた。敬初のYMCA戦法。(良)

AM 5 : 25 理にカメラの使い方を教える涙を流して感動していた by 敬(敬)

AM 5 : 45 ローソン出発ヘンナハーレーがいた。高岡チョッパーの方がかっこいいという結果が出た。Kスモークにこうかんうれしがになつとる(瀧)

AM 6 : 43 鯖江のサークルKまたハーレーだ(良)

AM 7 : 19 今日は良い天気でまっごうよかったばい少しねむい(良)

AM 7 : 25 出発進行(良)

AM 8 : 28 YOGO KOHGEN RESORT なんかすげえ山道峠道の途中のスキー場ごたつとこ。こやあ。でも滋賀にはなった。(良)チョットここまでねてしまった良ちんごめん(瀧)

AM 8 : 36 この雄大な自然の中での立ションはまごう気持ちよか。By りょうちん(良)

AM 8 : 55 おこられたけん出発(良)

AM 9 : 41 長浜信用金庫で金をうばった山本敬すぐ出発(良)

AM 10 : 11 びわ湖到着あついで!!(瀧)

PM 12 : 25 ひるねしたけん再び出発。あつい。あ

ちいいいいいいいい。(良)

PM 1 : 52 彦根のパチンコオメガで500円でタバコツーカートンとカートン半分+2個かったやっぱ大天才はなにをやってもすごい良一千円負け敬2千円負けハッハッハ。良ちん彦根で高速道路にのろうとして逆走(瀧)

PM 2 : 30 道 R306通行止あーもうぷんぷん(瀧)

PM 3 : 21 R421に変更 HOTSPAR にて休けいアイス買った永願寺青野店(瀧)

PM 3 : 35 出発 HOTSPAR(瀧)

PM 4 : 23 大安なばきちのさんひでえまじで。(良)

PM 4 : 28 まっごうつかれたばい。死んじまうかと思っちった。でも三重ナンバーのビートを発見鈴鹿まであと十五マイル(良)

PM 6 : 00 四日市、笹川 K。(敬) K 眠くてフラフラしとる(良)

PM 6 : 20 出発 K となりの車のドアにぶつける。キズついたしらんべ〜しらんべ〜(良)

PM 7 : 00 つかれすぎたけどやっとなつた。(良)

#### 7/26(日)二日目

AM 4 : 22 目覚める駐車場が見つからない7km歩きに決定。滝沢はまだ爆睡している。オレはかに7つもくわれたが富山のかと違いあまりかゆくないがそれでもやっぱりかゆいものはかゆい。by K ps、メットをもう一つもってくればよかった。(敬)

AM 5 : 35 でっばつ川ぞいのベースキャンプを出て一路サーキットへ。君の未来は輝いている(瀧)

PM 7 : 05 伊藤がこけたこれで OKI のガードナーに優勝が決定したと思う。空白の12時間強はまっごう暑くて死に死にのひやひやだった。山口君はもうくるのがいやなような顔していたが口では来年も来ようと言っていた。さすが浅く広くの山口君だ。by K(敬)なっなせ俺の心を・・・おわったおわったパチパチパチ俺の応援する an がまけた(良)う~~~~んすごいすごい by T(瀧)

#### 7/27(月)三日目最終日

AM 9 : 08 出発。家へ帰ろう熊モッズよさらば R1 を北上し一路四日市へ向かう足のジョリッパまめがいたいいたい(瀧)

AM 9 : 20 サークル K であさごはん(良)

AM 9 : 40 再び出発一路桑名へ。K がまるでライダーのようだ。めづらしくすぐウィンカーけしたけど足がいたいいたい(瀧)

AM 11 : 18 K がいない。いったいどこへ行ってしまったんだあもう K とは一生会えないかもしれない短い間だったけど楽しかったよ K 元気でなああ足がいたい足がいたい(瀧)

AM 11 : 34 K との涙の再開ああ足がいたい足がいた(瀧)





## おこげと ヘッドスライディング

専攻科 地域産業専攻  
平成5年修了  
矢郷清孝

金属工芸教官室内ソファ脇の床(当時～現在?)に焦がした痕がある。正確にいうと、焦がした痕を隠そうとして、木床タイル一面(45×45cm くらい)をグラインダーで削った痕だ。アトフキだったか、ファイゴのアトだったかは記憶に定かではない。けれど、削られたのはその痕からも確かである。本当ならば焦げないように、七輪下に鉄板かなんか敷くのだけれど。若かった。大ボケ野郎だった。その時アカイ顔をした普段は恐～い?先生方に、彼は怒られなかった。ということは記憶している。

輔祭も佳境に入り、大盛り上がりのなか。後輩叫ぶマイクを奪い取り、さらに叫ぶ輩がいた。もっと盛り上げようとしただけ?なぜだか‘やってやる!’朦朧とした意識のなか、なにが‘やってやる!’だ。でも、彼はやってしまった。美味しそうなモノはほぼ食べ尽くされていた(そう願いたい)テーブルの上にヘッドスライディング。飛び散るビールとつまみたち。ヒンシュクを買ったに違いない。以前、彼は知らない人から‘ダイビングの方ですか?’と聞かれた。ヒンシュクはどうやら知らないトコロで、今でも酒のつまみにされているらしい。

しかも、ヘッドスライディングはダイビングという表現に進化?していた。

恥ずかしながら、両方とも私のことである。ご飯のおこげ、野球のヘッドスライディングはオイシイ。(各人の見解に違いはあろうが…)高岡短大でのこれらの苦い記憶がいつか(すでに?)オイシイ記憶となることを祈りつつ。

**略歴** 昭和45年 富山県生まれ 平成2年4月 国立高岡短期大学産業工芸学科金属工芸専攻入学 4年3月 同卒業 4年4月 同専攻科入学 5年3月 同 修了 5年 高岡短期大学創立10周年モニュメント制作に参加 6年4月 財団法人富山県文化振興財団富山県民会館勤務 13年4月～ 現在同新川文化ホール勤務

## 回 想

金属工芸専攻 平成6年卒業  
塚本京香

学生時代を振り返って心に懐かしく甦るのは寒い冬の土間の情景です。砂にまみれながら夜半まで残って制作に熱中した日々。そこで学んだのはものづくりの姿勢でした。卒業から早くも12年、現在映画制作をするに至るまでの“旅”は高短に始まりました。「本当は映画がやりたいんです」とこぼした私に「やりたいことやれよ」と鍛金の中村先生に言われたのがそのはじまりでした。その言葉は一見簡単そうですが、美を追求してやまないartistである先生からの言葉だったからこそ心に響いたのでした。英文科のアメリカ人のコービー先生は英語の勉強にと Toefl の参考書を図書館に入れて下さり、又、アメリカだけはやめておきなさいと助言されました。そして廊下で出会ったカナダ人の専攻科留学生のすすめでトロントへ行くことになりました。成り行きようですが、今思えばよい選択でした。小さなきっかけで刻まれていく人生の不思議を思います。



4年後、念願のライオンソン大学映画科に入学、“水を得た魚”の如く(!)その媒体に自分の表現を見出しました。卒業後、今度はフランスにあるメディアアートのアトリエに行くつもりで3年の夏、フランス語を学びにモントリオールへ来たところ、現在の夫、ラフランスと運命的に(!)出会いました。2004年7月、娘のKarine(香琳)が生れ、家庭を営み子を育む生活が始まり、ひたすら夢を追ってきた自己探求の旅に新たな要素が加わりました。このこともまた、今後の自分の制作に豊さを与えてくれるものと考えています。

**略歴** 平成6年 高岡短期大学産業工芸学科金属工芸専攻卒業 9年 ライオンソン大学(カナダ、トロント)入学、短編映画「砂丘のある部屋」(平成11年)、「Fluid Landscape」(13年)が数々の映画祭にて上映され賞を得る。卒業後はモントリオールにて映画制作、T.V.番組編集などに携わる。

## ありがとうタカタン

情報処理専攻 平成6年卒業  
遠藤久美子(旧姓 中川)

今は小学生でもメールやインターネットを楽しめる時代になりましたが、ほんの10年前は時代が違いました。ワープロすら打ったことがない私が情報処理専攻に入学し、プログラム演習の課題の1つ1つが大変な作業でした。パンチミスはいつまでたっても無くならない、印刷プログラムでは私の学籍番号が大きく印字されたリストが大量に出力されたこともありました(涙)。そんな私が現在システムエンジニアとしてシステム開発に携わっているのが自分でも不思議です。

私の人生がいろんな意味で変わったのがタカタン時代です。勉強のほうは前述のとおり、そこそこついていく程度でしたが(先生、すみません…)、私生活では生まれて初めての一人暮らし、夕飯付きの夜間アルバイト。毎日が新しく、貴重な経験でした。駐輪場にバイクを並べたり、マネージャーをしていた野球部の練習中に足のじん帯を切ったりもしました(笑)。たった2年間のタカタン生活はあっという間でしたが、『高校生ほど子供でなく、社会人ほど大人でない』そんな多感な時期をタカタンで過ごせて良かったと今でも思います。

卒業後もタカタンで出会った友人と時々集まり、最近では旦那様や子供達も加わって家族ぐるみでお付き合いしています。タカタンでの出会いや経験をずっと大切にしていきたいと思います。ありがとうタカタン。



1992.11.15 野球部で企業チームとの練習試合後に撮影したもの。前列女性陣中央が自分です。

略歴 情報処理専攻 平成6年 卒業後、北電情報システムサービス株式会社に就職、現在に至る

## 回 想

情報処理専攻 平成5年卒業  
竹田加奈子(旧姓 荒船)

初めて高岡短期大学に行ったのは、高校3年生の春でした。二上山の麓にあるそのキャンパスの近代的、且つ何か余裕を感じる趣に圧倒され、ここに入学する決意を固めました。

推薦入学制度にて受験したのですが、面接試験では思うように自己表現が出来ず、終了後、「落ちた…」と泣きながら階段を下りたことが忘れられません。

ところが、無事、合格通知を受け取ることができ、新生活が始まりました。短大での2年間というのは、思っていたよりもずっと早く、慌ただしく過ぎましたが、その間に、学業以外にも、一人での生活や、多くの友人との出会いなど様々な経験を積み、今の自分の基盤が形成できました。

卒業後就職した会社に現在も勤務しています。事務処理の効率化を図るためのシステム作りや、社内ホームページの立ち上げなど、学生時代に学んだことを生かしつつ、常に前向きに取り組む努力をしています。また、授業で経験したゴルフがその後の趣味になったりと、その時のすべてが私をとっても豊かにしてくれました。そのおかげで、現在も仕事に趣味に充実した毎日を送っています。

今、高岡短期大学が新しい一歩を踏み出そうとしています。私もこれまでの経験や、これからの新しい出会いを大切に、何事にも挑戦していきたいと思っています。

んでいく事が重要であると言う事、高岡短大で学んだ、この「ものづくりの心」が私自身を支える柱となっています。またこの事は、どの分野、デザイン、建築、でも言える事であり、共通の考えだと、私は思います。

今年、高岡短大は富山大学に合併すると聞きました。大学名が変わろうと、この「ものづくりの心」を教える、先生方がいるかぎり高岡短大は安心であると私は思います。

私の勤めている会社にも後輩がすでに2人、入って来ており2人とも仕事、作品制作にとっても前向きに取り組んでおり、逆に私が刺激を受ける事があります。

今後も、「ものづくりの心」を持った卒業生が送りだされ、多方面で、活躍される事であると思います。

私も成長途中でありますが、高岡短大で学んだ事を軸にし、今後さらに成長して行きたいと思っています。

略歴 平成4年 高岡短期大学金属工芸科入学 7年 高岡短期大学専攻科卒業 7年 株式会社ミキモト装身具入社 11年 多摩美術大学造形表現学部入学(会社勤務終了後通学) 15年 多摩美術大学造形表現学部卒業 17年現在 株式会社ミキモト装身具原型制作担当技術主任

## 回 想

専攻科 地域産業専攻 平成7年修了  
片桐毅幸

現在、私はジュエリー制作をする、クラフトマンとして仕事をしています。高岡短大を卒業して社会へ出て10年経った今でも学生時代学んだ事が仕事や自分の作品を造る上で役立ち、また実践している事を改めて感じます。私がものづくりに於いて常に考えている大事な事は、時間的、社会的な制約の中でも自分の信念や情熱を見失わず仕事あるいは作品制作に対して献身的に取り組

